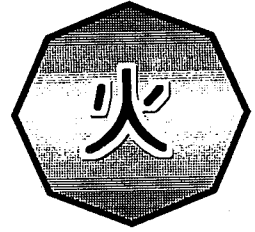


縁恩感動まんぼけい

小さな友だちのために



ペットブームである。街や公園で見かける過保護気味のペットたち、今や空前絶後の盛況ぶりだが、果たしてこのペットたちは本当に幸せなのだろうか。ブームの蔭で無責任な遺棄や虐待も後を絶たない……。

エリザベス・オリバーさんは英国人で、約20年前に来日。日頃は大阪工業大学で英語講師をしている。

動物を飼いはじめたきっかけは、出勤途上に瀕死の捨て犬を見つけたことから。

「人間の都合で、飼ったり捨てたり。これは明らかに動物虐待です」と日本人のモラルへ訴える。



一念奮起、やがてオリバーさんは拾ってきた犬や猫を育てるため、能勢町、山また山の地に手づくりで1,000坪の動物専用舎を建設。今では、犬80匹、猫24匹のほか、ミニ牧場には牛や馬、ヤギ、アヒル等も同居して、さながら大草原の愛情一家の里となった。ここの動物たちが、たいへん優しい目をしていることで、それが証明される。

しかし、単なる善意や思いつきで“救助”が続くはずはない。その後、活動の裏付けとして近畿圏に住む有志を募り、動物愛護団体ARK（アニマル・レフュージュ・カンサイ）を結成、この3月には捨てられた動物の“里親”探し運動や、動物実験への払い下げ中止を求める要望書に1万人の署名を添えて大阪府議会に提出した。

大阪府だけでも、毎年2万匹もの犬猫の生命が処分や実験で、はかなく消えていくという。

「動物愛護という点では、日本は、まだまだです」

人と共に生活することに慣れ、野生に戻れないペットたち。捨てられた後の悲惨な境遇は、まさしく人間のエゴの一面でもある。

生命の尊厳とは何か、このペット受難時代にクールな視点で活動続けるオリバーさんに、声援を送りたい。